声

心の垢を洗い流してくれたご本と出会って

金沢市　大平れい子

黒田武志ご上人さまのご講演をまとめたご本、『心やわらかに――今を生きる説法』の中の、〝明日を生きる〟を読ませていただきました。

今、私は二十歳。十七歳のときから信仰し、まだやっと三年目です。ですから、心の修行、成長がまったく足りないのですが、一隅を照らす人、己を忘れて他を利する人になりたくて、弥勒菩薩さまに心を磨いていただきたいと思っています。弥勒菩薩さまは、本当に素晴らしい慈愛のお方です。私が慈愛の人となれるようになるまでには、これからたくさんの心の宝を積み重ねていかなければなりません。

ご上人さまのご本と出会うことができて、私はとても大きな心の宝ものを得ることができました。嬉しくて、感謝の気持ちでいっぱいです。本当に心の底から「心やわらかに」なれるご本でした。

ご上人さまのご体験談には、驚きと感動でいっぱいにさせていただきました。お寺に逃げてきた、自称〝ヤクザ〟

の男の人を救おうと、持っていたわずかなお金を全部その人に渡してしまい、逃がしてあげたこと。インドへ行って、今を生きていくことの大切さを教えられたこと…

とくに、全国各地を托鉢行脚なさったときのお話には心打たれました。雨の日も風の日も、体が凍りついて疲れ果てながらも、途中でくじけずに頑張り通されたご意志の強さ。たった一人で托鉢されているとき、どれだけ不安な思い心配な思い、肉体的苦しさを感じられたことでしょう。これほどまでに一生懸命になって目的を成し遂げるお心に涙がこぼれました。

応量器にご喜捨をしてくださる人がまったくいない日もあったり、お金にはいつも苦労なさっていたのですね。一日の食事が、小さなコッペパン一個とバター一かけだったり…。私だったら、そんな空腹をがまんすることは絶対にできないような気がします。ただ、私はこの部分を読んだときに、今まで以上にお金を大切にしていかねば、と、肝に命じました。

ご上人さまが、女子校の前を通ったとき、やっと十円をご喜捨してくれた女子学生がいてくださった。その女子学生の心の尊さ、ありがたさに、ご上人さまが土下座をして感謝をしたという部分では、なんと、このお坊さまは謙虚なお方なのだろうかと、驚きの声をあげそうでした。きっとご上人さまは、私の大好きな最澄さまのお名前のように、最も澄み渡った心の持ち主に違いありません。なぜなら、心が美しい方でなければ、自分よりはるかに若い少女に、たとえどんな状況であろうとも、それほどまでに素直に、謙虚に、感謝できるわけがないと思ったからです。

なんだか私はこのとき、自分がとても傲慢な、最低の人

間のような気持ちになりました。いろいろな修行がありますが、托鉢ほど謙虚な心が必要なものはありません。尊いご上人さまでも、これほどの厳しい修行を積んでこられた…私のような足りないものは、もっともっと一生懸命に、人の二倍も三倍も努力していかなければいけないのだとわかりました。

また、ご上人さまは、生きることの大切さも教えてくださいました。今、生きている、たった一人しかいない自分を大切に。そして、自分の人生を真剣に、精いっぱい生きる。生かされていることに感謝して生きる。それが、〝本当に生きる〟ということなんだということを、感じさせていただきました。

ご上人さまが私の心の垢を流してくださり、その上、私の心の一隅を明るく温かく照らしてくださいました。本当にありがとうございました。

＊

信仰することができる喜びは、お金では買えません。信仰とは何よりの宝であり、たとえ何一つ財産がなくても貧しくても、真剣に信仰する心があるのなら、その人は誰よりも幸せな人なのです。今、私は本当に自分が幸せものだとしみじみ感じています。

〝身の宝よりも心の財第一なり〟

日蓮上人のお言葉を、私はいつも心にとめています。

私の祖父は、日蓮宗の僧侶でした。とても優しく、私は祖父の怒った顔は見たことがありませんでした。そんな祖父のイメージが強かったからでしょうか、私は幼い頃から、〝お坊さまってすばらしいな〟と思い続けており、その気持ちは成長するにつれますます鮮明になりました。今の私の夢は、できることならば、どのようなお寺さまでもいいから、お嫁に行きたいなあ、

ということなのです。もしもその夢が叶ったなら、私はみなさんのお墓に、たとえ一輪ずつでもお花をお供えしてあげたい…。毎日一生懸命心磨きに務めながら、お寺さまにお嫁にいけますようにと、弥勒菩薩さまにお祈りしているのです。

心強い限りの新たな挑戦

山形県鶴岡市　宝円寺　阿部全也

先日、私は、黒田武志尊師の拝顔の栄を賜ることができました。貴、成寿山善光寺御称名そのままの霊気に迎えられ、お導きのまま上香礼拝、拝見した数々の名品・調度、いただいた香り高い茶菓…。そしてはじめて聴くすばらしいお話やご所見など、今以て、あのひとときを忘れることができません。ありがとうございました。

あのとき頂戴した〝善光寺海外留学僧派遣育英会〟の要項や、輝かしい冊誌『成寿』、さらに貴重な論文集を拝読させていただきました。

読むほどに、今日の宗教の現状を深く考えさせられました。中でも我が仏教、果たしてこれで本当に良いのか…年甲斐もなく（小生、八十三歳になります）あれこれと思い続けました。

日本の仏教は大乗仏教とは申せ、現状はその名に値するのだろか、と。各宗派、宗祖の遺産に篭もり、惰眠をむさぼっているような気がします。言い過ぎでしょうか。自分もその一人に過ぎないのに、口幅ったいことを思わず申し上げてしまいました。お笑いください。

しかし、私が思いましたのは、黒田尊師は、そんな現状の殻を打ち破り、誠に精神誠意を以て挑戦を続けていらっしゃる。しかも、一歩、一歩、着実に前進されています。そ

の果実が今、留学僧の中から生まれつつあります。誠に心強い限りです。貴師のたゆまぬ志は、留学僧を通して輪となり、大きく広がって行くことでございましょう。心から、ますますのご活躍をお祈り申しあげております。

一円のコイン

信州大学人文学部留学生　江　林（中国）

私の引き出しに、一円のコインがある。

一円なんかまったく取るに足りないと思われるのは当然のことだろう。しかし、この一円のコインは私には何よりも大事なものだ。これを見たら、無邪気でかわいい少年の姿が目の前に浮かんでくる。

日本に来て半年もたっていない六月の、ある日曜日のことだった。その日は、南安曇郡梓川村公民館が主催する「留学生と青少年の集い」という交流会が開かれることになっていた。私は幸いにこの交流会に参加するチャンスを得られたので、留学生一行十六名を迎えに来てくださった梓川の方に導かれ、喜んでバスに乗ったのだった。

約三十分ほど走って、梓川に着いた。バスを降りると、同村の公民館の方々が親切にあいさつに出て来て、私たちを館内へと通してくださった。中では、数十人の子どもたちが私たちを待っていてくれており、かなりのにぎわいだった。活発で、元気いっぱいの男の子や女の子たち。彼らは六つのテーブルをそれぞれ囲んで座っていたので、私たちも六組に別れ、子どもたちの仲間入りをすることになった。

私はある男の子のそばに腰をかけた。十歳ぐらいに見えたその子は、顔も服装も中国の子どもと何らかわりがない。同じアジア人だからなあ

と思ったととたんに、急速な親近感が湧いてきた。

彼は私を見て、くちびるをピクピクさせて、何かを話しかけようとしているようだった。しかし、大人で、しかも見知らぬ外国人の私とどうつき合ったらいいのか、迷っているらしい。ついに彼はうつむき、口をつぐんでしまった。

本当はひとなつっこい子なのだと一目でわかっていた私は、かわいい子に窮屈な思いをさせてはいけないと思い、こちらから話しかけることにした。

「お名前は？」

「上嶋圭介」

「何年生？」

「六年生」

「今年おいくつ？」

「十二歳」

私の質問に、彼は一つ一つきっぱりと答えてくれた。しかしまだ少し、かたくるしさが残っているようだった。私は話を続けた。

「上嶋君は宿題が好き？　きらい？」

「きらい」

彼はずばりと答えた。

「それじゃ、なにが好き？」

「スポーツ」

そう答える頃には、もう彼の緊張感はなくなったとみえて、口数もずいぶん多くなってきた。来年中学校に進学するとか、お母さんからこづかいをもらわないとか、毎日バスで学校に通っていることなどを、彼はだんだんと打ち解けて教えてくれた。

「おにいちゃん、中国は広いね」

「うん、そうだよ」

「中国の小学生も宿題をやるの？」

「もちろん」

好奇心をもって私に中国のことをいろいろ聞いてくるようになった彼に、私は一つ一つまじめに答えた。

ゲームが始まった。うちのグループこそ負けないと、み

んな一生懸命に参加。自分たちのグループを応援する声も響き、公民館の中はたいへんにぎやかになった。

「おにいちゃん、がんばれよ」

上嶋君は大声で私を応援してくれた。とうとう最後に私たちのグループが優勝することができ、グループの全員が飛び上がらんばかりに喜んだ。上嶋君はとりわけ興奮して、私の手を引っ張って、

「やった！　やった！」

と叫んだ。

私たち二人はすっかり友だちになっていた。

時のたつのは楽しいほど早いもので、知らず知らずのうちにもう帰る時間が近づいていた。私は記念として、中国から持ってきた小さなカメの玩具を上嶋君にプレゼントすることにした。彼は珍しいものをもらって、嬉しくてたまらないように、ありがとうと何度も礼をいった。

「おにいちゃん、住所と電話番号教えてよ。今度おにいちゃんに電話してもいい？　年賀状書いてもいい？」

「いいとも！」

「秋にまた交流会があるって聞いたよ。おにいちゃん、絶対にまた来てね」

何度も繰り返す彼。なんてかわいい子なんだろうと、私は感動しながら、

「はい、はい、必ず来るよ」

と答えた。

いよいよ出発の時間になった。

バスに乗ろうとしているとき、見送りに来てくれた人の群れの中から、いきなり上嶋君が飛び出してきた。

「おにいちゃん、これ、日本のお金だ。記念として…」

そういって私に手渡してくれたのが、一円のコインだったのである。

心を打たれ、たとえようもないすがすがしい気持ちが体中に満ちた。外国のおにいちゃんにも、記念として何かあ

げなければ、と、彼はきっと考えたのだろう。

これは一円のコインではなく、国を越え、年齢を越えた人間同士の相互理解と、人間の愛そのものだと私は思った。

バスは梓川を後にした。上嶋君と村の多くの子どもたちは、見えなくなるまで手を振り続けていた。そのときの私の視界は、あふれる涙でぼやけてしまっていたが、無邪気でかわいい少年の姿はいつまでも、頭の中に焼きつけられている…「留学生の想い・第四集　留学生から日本のみなさんへ」より―

福田智昭さんが得度

平成四年十月十三日に福田智昭さんが善光寺黒田武志住職のもとで得度された。これからの活躍に期待したい。